様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月　７ 日現在

機関番号：１８００１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ１３４５５

研究課題名（和文）国頭諸語の記述文法とドキュメンテーション

研究課題名（英文）Grammatical Descriptions and Documentation of Kunigami languages

研究代表者
當山　奈那（Tohyama, Nana）

琉球大学・人文社会学部・准教授

研究者番号：９０７９２８５４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の成果は次のとおりである。
1.伊平屋島，伊是名島，与論島で音韻論・文法論の調査と分析を行い、論文や報告書に発表した。特に,瀬楽亨氏（韓国外国語大学）との共同研究をとおして，与論方言の構文論の調査では、他の方言や日本語にはみられない重要な現象が発見されたため、研究会や学会で報告を行った。国際誌へ投稿し、論文が掲載されている。
2.伊平屋島，伊是名島，与論島で収集した談話資料や言語資料を書き起こした。収集，整理した言語資料は今後出版，公開予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は，国頭諸語において音韻・文法にわたる言語記述を行い、その言語的特徴を明らかにした点で，今後の国頭語の研究を促進するものとなる。特に，与論方言の受動動詞の接辞についての研究では，管見の限り他の日琉の諸地域変種に見られない現象や特徴が明らかとなっている。この点で，本研究は受動構文の研究に関する一般言語学的な研究に資するものといえる。さらに，本研究の過程で談話資料の収集も実施した。消滅の危機に瀕した琉球諸語の多様な変種について多目的に利用可能な一次資料を得ることができた。

研究成果の概要（英文）：The results of this research are as follows.
1. Phonological and grammatical investigations and analyses were conducted in Iheya, Izena, and Yoron dialects, and published in papers and reports. In particular, in the investigation of the syntax of the Yoron dialect, important phenomena not found in other dialects or in Japanese were discovered and reported in research groups and conferences. The paper has been submitted to an international journal and has been published.
2. Transcribed the discourse and linguistic materials collected in Iheya, Izena, and Yoron islands. The collected and organized linguistic materials will be published and made public in the future.

研究分野：琉球語文法

キーワード：国頭語　ドキュメンテーション　記述文法

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究で扱った国頭語は地理的条件に起因して、島内でも地域ごとの言語差が大きいことが先行研究で指摘されてきた。しかし、言語差が大きいと指摘されているにも関わらず、各地域の調査研究はまだ不十分で、実態は明らかとなっていなかった。最も研究が進んでいた沖永良部島は言語記述や談話資料の蓄積があったが、他の地域では、言語資料が存在するのは与論島の『与論方言辞典』と菊(2006～2014)『与論の言葉で話そう』がある。ほとんどの方言は、音韻面（分節音／アクセント）の方言差の研究でふれられている程度か、語彙集がある程度で、文法論の研究は希少であり、談話資料の蓄積もなかった。

２．研究の目的

本研究は、島嶼間内での言語差が大きい北琉球諸語の国頭語を対象に、国頭語に属する与論島、伊平屋島、伊是名島の複数地点の地域方言について、音韻論・形態論・構文論にわたる文法の体系的記述を行うこと、言語ドキュメンテーションの方法論に基づいて自然談話・民話・民謡などの一次資料を収集しアーカイビングを行うことを目的とした。

３．研究の方法

与論島、伊是名島、伊平屋島の方言を対象に、60 代～80 代の話者を調査協力者として、自然会話、文例などの一次資料の収録と、音韻論・文法論における文法体系を明らかにするための質問調査を行った。

４．研究成果

4.1 談話資料

自由会話, 場面設定会話（近所の家に鍬を借りに行く場面)、童話「大きなカブ」の方言訳、文法の用例を録音した。今後、言語資料として論文集やウェブサイトでの公開を予定している。

4.2 文法概説

伊平屋島島尻方言の母音は、長短の区別があり、5 個の短母音／i,e,a,o,u／と 5 個の長母音／iː,eː,aː,oː,uː／の計 10 個である。子音は、／ʔ,p, b, k, g, t, d, s, z, m, ʔm, n, r, j, w, h／がある。そのほかに、口蓋音化した子音／gj, zj, cj, sj／、唇音化した子音／kw, hw／がある。

名詞の格形式は、ハダカ格、ga 格、nu 格、keː格、neː 格、heː格、hara 格、mari 格、tu 格、kaN 格があり、〈とりたて〉を表現する形は、=ja、=gaja 、=N、=ganN、=ru、=garu、=bike、=mari、=tanteN、uppi、jatiN がある。

動詞は、文のなかの機能にしたがって、大きく終止形 finite form と非終止形 non-finite form とにわかれている。非終止形の動詞は、連体形、連用形、条件形にわかれていて、それぞれ独自の体系をもっている。次の表に動詞「のむ」を代表させて一覧を示す（確認できていない形式は空欄にしている)。

【表】動詞「nununN（飲む)」の語形変化

ムード＼テンス		非過去形	過去形
直説法		nun-uN（飲む）	nu-naN（飲んだ）／nun-utaN
質問法	肯否質問	nun-umi（飲むか）	nu-niː（飲んだか）/nun-uti num-iː（飲んだか）
	疑問詞質問	nun-oː	nun-aː（飲んだか）
命令法		num-eː（飲め）	
勧誘法		num-ani（飲もう）nunoː（飲もう）	
連体形		nun-unu（飲む)、nun-uN	nu-nanu/nun-utanu
連用形	中止形	num-i（飲み）, nun-eː（飲んで）	
	同時形		

条件形	原因形	**nun-utu**（飲むから）	**nu-natu**（飲んだから）
	契機形	nu:no:（飲むと）	
	前提形		
	譲歩形	**nune**N（飲んでも）	
	逆接形	**nunuʃi**ga（飲むが）	**nunaʃi**ga、**nunutaʃi**ga
	目的形	**numin**ga（飲みに）	

終止形は、いいおわりの述語になって文の陳述のセンターとしてはたらくことから、テンス、ムードを表示する形式として文法的な形を発達させている。

連体形は、連体的な従属節の述語になって名詞をかざる形である。連体形も非過去形と過去形の対立があり、終止形と同様に過去に２系列（第一過去形と第二過去形）があるが、連体形のあらわす時間は、いいおわりの述語があらわす時間を基準にする相対的なテンスである。

連用形は、ふたつの出来事をならべ、その時間的な関係を表現するならべあわせ文やふたまた述語文のつきそい文（従属文）の述語になる。第一中止形は、形式上、現代日本語の第一中止形に対応し、単語つくりや形つくりの要素になる。伊平屋方言の場合、単独では述語になることはない。第二中止形は、現代日本語の第二中止形に対応し、第一中止形に接辞「テ」が接続している。他の沖縄島諸方言の場合、あわせ文の述語として使用される。例えば，ふたつの動作間における同時の関係や先行後続の関係をあらわしたり、補助動詞をともなって文法的な形式を作る要素といったことが見られる。しかし、伊平屋方言は第二中止形をもたない。時折、調査中に観察される第二中止形は周辺の方言や首里那覇方言のような権威的な方言との接触による影響とみなしている。

第三中止形は第一中止形にアリ（有り）が接続していて 、他の沖縄島内の諸方言では先行後続の時間的な関係をあらわすあわせ文の述語でしか使用されないが、伊平屋方言や宮古島方言、石垣島方言では、単語つくり、形つくりの要素にもなる。

条件形は、条件づけを表現するあわせ文の従属文の述語になる。

伊平屋方言の動詞の活用形の特徴としては、**(1)**完成相の直説法の終止形、質問法の非過去形のように、第一中止形に存在動詞 **u**N（居る）が補助動詞としてくみあわさり、音声的に融合したタイプ、**(2)**否定形や命令形や勧誘形などのような、**u**N の融合しないタイプ、**(3)**第三中止形や、継続相のように存在動詞 **ari**（あり）が融合しているタイプが同居している点が大きな特徴であるといえよう。さらに、派生（文法的な接尾辞）によってあらわされるものや、補助的な単語（補助動詞、コピュラなど）とのくみあわせによってあらわされるものがあり、動詞の形態論的な形式は複雑な活用の体系をなしている。

4.3 受動接辞を用いた特殊な構文

与論方言では、受動の形態素**-a:ri** は動詞の語根に後接する。**(1)**の例では、動作主体（太郎）が与格 **na**N で表示されている。これは、動作主体が主格 **ga** で表示されている能動文**(2)**と対照的である。

1) ʧino: **tara=na**N **kj-**a:ri**-ta-**N.
縄.TOP 太郎**=DAT** 切る**-PASS-PST-IND**
「縄は太郎に切られた。」

2) **tara=**ga ʧina **ki-ʧa-**N.
太郎**=NOM** 縄**.ACC** 切る**-PST-IND**
「太郎が縄を切った。」

この能動／受動における通常の格表示に加えて、**(3)**のような例が観察される。ここでは、**(1)**と同じ受動形態素である**-a:ri** があらわれているが、動作主体（太郎）が主格 **ga** で表示されている。

3) wa:tʃo: **tara=**ga **ʧina** **kj-**a:ri**-ti,** **kuma-ta-**N.
私.PL 太郎**=NOM** 縄**.ACC** 切る**-PASS-SEQ** 困る**-PST-IND**
「私たちは太郎に縄を切られて、困った。」

(3)のような構文は、主語にさしだされた参与者に対する受影性の意味を伴いながら、「理由」を表す副詞節をマークする構文である。

当該構文のもつ受影性について次のようなことをいうことができる。まず、利益性（利益／不利益）に関与しないことを用例と他の琉球語の受動形態素に関する先行研究から示すことができる。そして、三項動詞の場合、動作あい手を主語の位置にすえることが可能である。このことから、当該構文は、「はた迷惑の受身」にも、「第三者の受身」にも還元できない。

また、当該構文は、間接受動文がもつ受影性を保持しているが、受動構文ではない。根拠として、他動詞だけでなく、自動詞や存在動詞（aN（ある）、ϕuN（いる））、一部の状態動詞（jamuN（いたむ））も受動動詞の形になり当該構文を作ることができる。その受影性について、主語の受影者に影響を与えるのは、主格で示される動作主体がひきおこす事態や存在、状態であり動作主体自体は影響者ではない。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　2件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 當山奈那	４．巻 22
２．論文標題 与論方言における主語標示に関わる格=とりたてについて	５．発行年 2019年
３．雑誌名 琉球アジア社会文化研究	６．最初と最後の頁 47 - 68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 當山奈那	４．巻 1
２．論文標題 伊是名村諸方言（字伊是名方言、字勢理客方言）の動詞活用資料	５．発行年 2020年
３．雑誌名 シマジマのしまくとぅば―危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究 令和元年度―	６．最初と最後の頁 37 - 56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Seraku Tohru、Tohyama Nana	４．巻 42
２．論文標題 The affective construction in Yoron Ryukyuan	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Studies in Language	６．最初と最後の頁 418～454
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1075/sl.17002.ser	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 當山　奈那	４．巻 5
２．論文標題 琉球諸語における音声教材作成について―言語習得と方言教育と危機言語の記録保存の各観点から―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 琉球アジア文化論集	６．最初と最後の頁 161-183
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 當山　奈那	４．巻 平成30年度
２．論文標題 沖縄県伊平屋方言の動詞の活用と文法的な形式	５．発行年 2019年
３．雑誌名 危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究	６．最初と最後の頁 49-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 當山奈那・目差尚太	４．巻 －
２．論文標題 沖縄県伊平屋村島尻方言	５．発行年 2018年
３．雑誌名 文化庁委託事業報告書平成29年度危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究	６．最初と最後の頁 103-145
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Seraku Tohru、Tohyama Nana	４．巻 44
２．論文標題 Grammatical nominalization in Yoron Ryukyuan	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Studies in Language	６．最初と最後の頁 879～916
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1075/sl.19057.ser	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕　計10件（うち招待講演　1件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 當山　奈那
２．発表標題 与論方言の格＝とりたてについて
３．学会等名 「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」研究発表会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Masayuki Onishi, Nana Toyama
２．発表標題 Inheriting Linguistic Diversity in Okinawa: An Orality-based Approach of Promoting shima-kutuba
３．学会等名 Japanese Studies Association of Australia（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 當山　奈那
２．発表標題 恩納村の副詞の和琉辞書的記述のためのおぼえがき
３．学会等名 沖縄言語研究センター定例研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 當山　奈那
２．発表標題 与論方言の可能表現―肯定文を中心に―
３．学会等名 沖縄言語研究センター定例研究発表会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Tohru Seraku, Nana Tohyama
２．発表標題 Grammatical Nominalisations in Yoron Ryukyuan
３．学会等名 51st Annual Meeting of the Societas Linguistica Europaea（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 當山　奈那
２．発表標題 与論方言のとりたて表現 ―〈極端―反極端〉、〈限定―反限定〉と関わるとりたて助辞を中心に―
３．学会等名 沖縄言語研究センター定例研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 當山　奈那
２．発表標題 危機言語としての琉球諸語と音声教材の作成―持続可能な研究と実践をめざして―
３．学会等名 共同公開シンポジウム島嶼地域における言語研究の可能性と課題（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 當山　奈那
２．発表標題 琉球諸語における教材作成と展開：記述研究との関連から
３．学会等名 第32回日本音声学会全国大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 當山　奈那
２．発表標題 琉球諸語の音声教材作成と展望
３．学会等名 日本方言研究会
４．発表年 2017年

１．発表者名 Seraku, Tohru and Tohyama, Nana
２．発表標題 Grammatical nominalisations in Yoron Ryukyuan
３．学会等名 51st Annual Meeting of the Societas Linguistica Europaea（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
大韓民国	Hankuk University of Foreign Studies			